

個性不要のキャラ立ち文化

中野香織

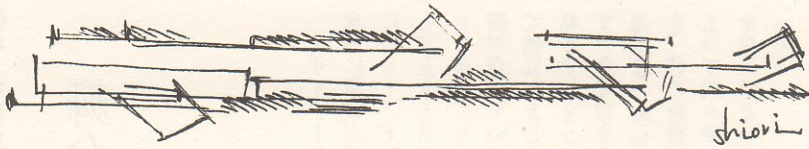
学生時代は東京の下北沢付近に住んでいた。徒歩で二十分ぐらいのところに、いつ行っても熱気ムンムンの劇場「ザ・スズナリ」があり、そのうちにきれいな「本多劇場」もできた。駒場小劇場も元気だった頃で、芝居小屋には比較的、足繁く通っていた。同時代の活気とともにありたいという渴望やら、時代の先頭に立っていたいというざらざらした野望やらの気配が、当時の大小の劇場周辺に濃厚に漂っていたような記憶がある。

子育てが始まって夜の外出がままならなくなつてからは、劇場からもすっかり足が遠のいてしまつて二十余年。だから、現代において演劇文化がどのようなことになつていくのか、まったくわからないのだが、ときどき、今の仕事（ファッション時評）の延長上に、八〇年代の劇場周辺で感じたのと同じような、猥雑で混沌とした、「旬」のものが放つ独特の熱気を感じることがある。

休日の都心のストリートや、コスプレサミット、コミケ会場など、コスプレイヤーがわらわらと集う場においてである。「表現を見てほしい」と渴望するコスプレイヤーと「強烈で面白い表現が見たい」観客が集う、日常とかけ離れた異次元のような空気は、かつてのザ・スズナリ周辺に漂っていた雰囲気を出させるのである。

アニメやマンガのキャラクターになりきるコスプレは、仮装ではない。ハロウィーンなどに見られる仮装は、「あ、ゴブリンね」「魔女ね」とおおまかにわかればそれでいいところがあるのだが、コスプレイヤーは髪の色、アホ毛（へんな方向に飛び出ている）、二本の髪、衣裳の微細なディテールに至るまで、完璧に再現し、キャラクターになりきらなくてはならない。コスプレイヤーにとって、たとえ路上であろうと、そこは「舞台」なのである。

「舞台感」をいやおうなく高めているものに、カメラのフラッシュがある。群がるカメラマンには、二種類の人種がいる。ただただ撮って被写体の写真をコレクションすることだけで満足という「オタク」なカメラ小僧と、海外メディアのフォトグラファーである。後者は、本場ニッポンのコ



shiori

スプレカルチュアに興奮し、本国メディアで大々的に紹介する（ちなみに、ジャパンアニメのコスプレがもつとも盛りあがっている国のひとつに、フランスがある）。本物の舞台なら撮影禁止が多いと思うのだが、路上のコスプレイヤーにとつて、アマ、プロ入り混じるカメラの大量のフラッシュは「ここは舞台、私は女優」感を高める、これ以上望めないくらいの効果を発揮する。

かくしてアニメコスプレイヤーの影響力は「舞台」の外に広がり、かねてからの海外での「オタクカルチャー」人気と手を携え、ついにはランウェイにまで及んでいる。二〇〇九年の春夏コレクションを総括するキーワードとしてモード界で話題になったのが、「Manga」である。

誇張されたプロポーション、ひらひらふりふりのお姫様テイスト全開のスタイル、女指令官のセクシーなボンデースタイル、制服を極端に改造したようなジャケットやスカート、ヘッドピースやティアラ（王冠風髪飾り）などのマンガ的アイテム。こんな二次元ファンタジー色の強いモードを、三次元のモデルが大真面目に着て、ランウェイを歩いた。

連想させるのは、「ベルばら」のオスカルや、「ヤッターマン」のドロンジョ、「うる星やつら」のラムちゃん、「フレッシュユプリキュア」のキュアペリーといったおなじみのキャラクターたち。彼女たちはみんな、現実の世界では許されないことを、あるときには美しくまたはキュートに、またあるときにはおまぬけになりながら、楽しげにやっつけてのける女たちでもある。コスプレとまではいなくても、そんなキャラクターの残像をかぶることができるモードに、「人生はもつとドラマチック、いや、マンガチックに、個性を發揮して大胆に楽しみましょうよ」というデザイナーのメッセージを読み取りたくなってしまう。

とはいえ、その源流のひとつたるコスプレ文化を生んだ日本においては、生のままの個性の発露はあまり許されない（いじめられる）。ただし、人や社会とのスムーズな関係においては、個性は必要とされなくとも、やや演技的なキャラは立っていることが求められる。個性なしのキャラ立ち文化。だからこそ、日本でアニメコスプレが発達したとも考えられるのだが。

アニメやマンガのこうした影響は、近いうちに、日常世界を侵食してくるだろう。すでに、目を8%大きく、輪郭を2%小さく写すプリクラは、現実の女の子の顔をそれに近づかせつつある。思えば浜崎あゆみやPUFFYは無機質に近いマンガ顔で時代をリードしていたのだ。

人間の生々しい個性を否定し、マンガに美の基準を求め、マンガ的にキャラ立ちすることで魅力的になれる。そんな時代の到来は、喜劇なのか悲劇なのか。